# 江戸の暮らしを支えた「水の道」

江戸の町が拡大して人口が増えると、米をはじめとする食料や生活に利用する物資を全国から調達する必要が出てきた。大量に物資を運ぶ手段として海運が発達し、大小さまざまな船が活躍した。

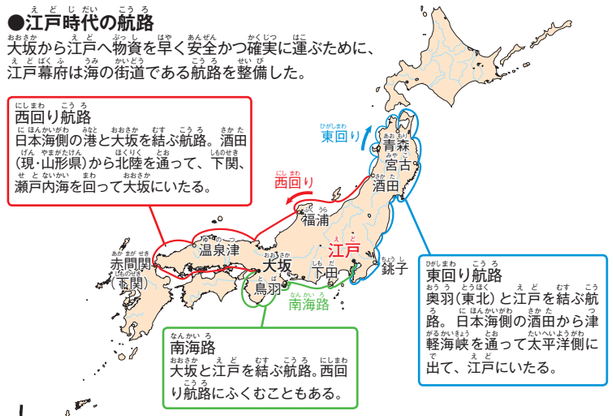
## <大坂から江戸へ>

米、油、酒、木綿、紙、金物などの物資の多くは、商工業の中心都市だった大坂(現・大阪)にいったん集められ、船で江戸に運ばれた。政治の中心地だった江戸の人々が消費するものを取り仕切っていた大坂は、「天下の台所」とよばれた。

≪新酒番船入津繁栄之図≫ その年にできた最初の酒を運ぶために大坂湊を出た船が、江戸湊に入ってから小舟にたるを積みかえて、酒問屋が建ち並ぶ江戸の新川に入ってきたところ。どの船がいちばんに到着するか、速さを競った。

### ●江戸時代の航路

大坂から江戸へ物資を早く安全かつ確実に運ぶために、江戸幕府は海の街道である航路を整備した。



### 江戸に向かう航路を開発した人

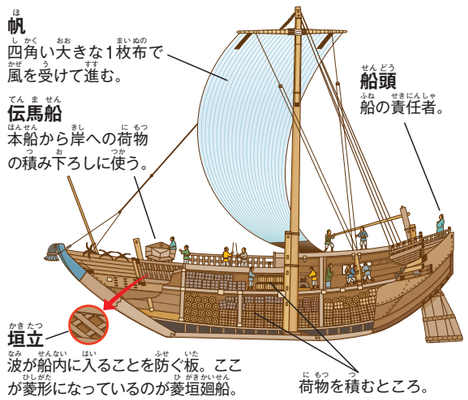
河村瑞賢(1618~1699)

伊勢国(現・三重県)生まれの材木商。土木技術にもくわしく、幕府の命令で東回り航路、西回り航路を開発した。上方の淀川などの治水工事も行い、のちに旗本になった。

## 大きな船で大量に運ぶ

一度に大量の荷物を運ぶために、千石船(弁財船)とよばれる大型船が活躍した。江戸と大坂を結ぶ定期船には、米や油、木綿などを運ぶ菱垣廻船と、酒などのたるに入ったものを運ぶたる廻船があった。ほかに、西回り航路で東北と大坂を往復する北前船も重要な役割を果たした。

**千石船**
木造の船で、米を1000石(約150ｔ)積むことができる。






人とものが集まる河口に栄えた町を「湊」といい、船着き場があるところを「港」という。

## 小さな船に積みかえる

大きな千石船は、江戸湊の入り口の鉄砲洲(現・明石町周辺)の沖までしか入ることができなかった。そのため、荷物は伝馬船などの小さな船(舟)に積みかえられて、隅田川から日本橋川などに入り、水路を通って江戸の町のなかに運ばれた。

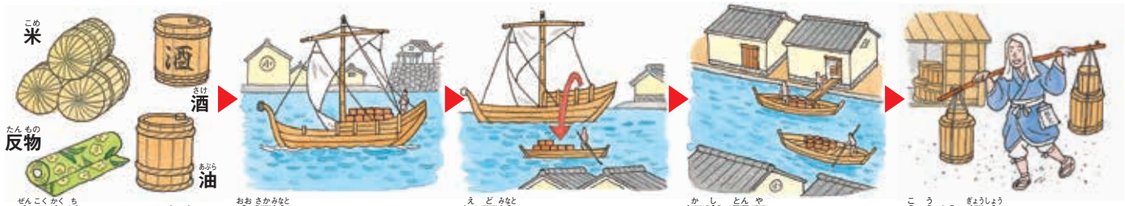
≪名所江戸百景鉄砲洲築地門≫
小さな船に積みかえているところ。帆を張っているのが千石船、帆がないのが伝馬船。

## 江戸産のものはくだらない?

上方(京都や大坂)から江戸へ向かうことを「下る」といった。上方の品は「下りもの」とよばれ、高級品として人気があった。一方、江戸近郊でつくられたものは「下らない(つまらない)もの」とされ二流品あつかいされた。

「江戸買物独案内」という江戸時代のガイドブックにのっていた「下り酒」を扱っている問屋の案内の1つ。

### ●品物が江戸の人々に届くまで




全国各地でいろいろなものがつくられている。

**大坂湊**
湊近くの問屋にさまざまな品物が集まり、千石船に積まれて江戸に運ぶ。

**江戸湊**
隅田川の河口で、千石船から伝馬船などの小さな船に積みかえ、水路を通って運ぶ。

**河岸・問屋**
水路や川沿いにある河岸で荷物を陸にあげ、問屋の倉庫に品物が保管される。

**小売り・行商**
問屋から仕入れた品物を、店頭で売ったり、売り歩いたりして、人々の手元に届ける。

**江戸時代の中央区にあったおもな河岸**
材木、米、竹、白魚などの名前がついているところは、それぞれの品物の陸あげに利用された(→p.141)。

## 川沿いにはたくさんの河岸や問屋があった

船で運んできた荷物を陸にあげる場所を河岸という。川岸にあり、海に面していて川や水路が多く、さまざまな問屋が集中していた。江戸時代の中央区内には、さまざまな河岸が設けられ(→p.144)、たくさんの問屋が並んでいた。日本橋魚河岸(→p.28)はその代表格で、市場が開かれてにぎやかだった。

日本橋小網町の日本橋近くの河岸のようす。右岸では俵が陸あげされ、左岸では木材が陸あげされている。材木問屋の材木置き場があるのもわかる。

天皇の住まいを中心に、近づく方向を上り、遠ざかる方向を下りという。江戸時代は京都が起点で、江戸方向は下りだった。